

# 2020年度（2021年3月）卒業アンケート結果について

※数字は実数

2021年3月卒業生142名のうち、123名から回答（86%）があった。

## I 専修言語について

### 2020年度3月卒業アンケート

123

## I 専修言語について

専修言語	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	日本語	合計
	56	11	5	7	21	23	123
1.あなたが専修言語以外に学んだ言語は何ですか。(複数回答可)	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	日本語	
	30	19	19	13	10	0	
	その他	未選択	無回答				合計
	0	0	32				123
<その言語を学んだ期間>	1年春学期～1年秋季学期	1年春学期～2年春季学期	1年春学期～2年秋季学期	1年春学期～3年春季学期	1年春学期～3年秋季学期	1年春学期～4年秋季学期	
	43	21	10	7	9	35	
	2年春学期～2年秋季学期	1年春学期のみ	2年春学期のみ	2年春学期～3年春季学期	3年春学期～3年秋季学期	4年春学期のみ	
	3	0	0	0	1	4	
	1年春学期～4年春季学期	3年春季学期のみ	3年秋季学期～4年秋季学期	3年春学期～4年秋季学期			合計
	12	3	17	11			176
2.あなたが学んだ研究プログラムは何ですか。(複数回答あり)	①多文化国際理解プログラム	②航空/観光ホスピタリティプログラム	③翻訳・通訳プログラム	④国際ビジネスプログラム	⑤英語専門職プログラム	⑥比較社会文化研究プログラム	
	14	18	14	11	9	8	
	⑦ヨーロッパ研究プログラム	⑧アジア研究プログラム	⑨日本研究プログラム	無回答			合計
	12	12	27	19			144

専修言語以外に学んだ言語の回答をみると、専修言語が英語と答えた学生（56名）は全員いずれかの第2言語を選択していた（2019年度は未選択の者が2名、2018年度は10名）。また、英語以外の言語を第1言語とした学生（67名）の中には無回答の者が32名いた（2019年度は11名、2018年度は13名）。このことは専修言語以外の言語を学んでいない（あるいは途中で第2言語の学修をやめた）者が一定数いることを示しているのではないと思われる。英語の学生はフランス語（19名）ドイツ語（18名）を選択した者が多かった。また、第1言語が英語以外の学生はやはり第2言語として英語を選択履修した者が多い（今年度30名、2019年度30名、2018年度43名）。

本学では2つの言語の学修を推奨しているが、第2言語を学修した期間を問う回答では、1年生の1年間だけでなく、留学前の2年生春学期まで、また卒業前の4年生秋学期まで履修を継続した学生もかなりいることがわかった。ただし、1年間だけと回答した学生も一定数いることから、初修段階でやめる学生とそうでない学生とに分かれると考えられる。2年の秋学期から半年、もしくは一年間留学する学生がいずれの専修言語にも多数いることから、こうした学生たちは第2言語を途中で止めてしまう（止めざるを得ない）ことも要因と考えられる。

学修した研究プログラムをたずねる質問では、複数回答ではあるが、昨年度と同様、観光ホスピタリティプログラムと多文化国際協力プログラムの回答が多かった。また、昨年度と同様に無回答（19名、昨年度24名、2018年度は36名）とする学生が多く、昨年の分析コメントにもあったように「研究プログラムごとの最低修得単位数が設定されておらず、研究プログラムを横断して必要な科目を履修できるような設計になっている」ことから、研究プログラムへの所属意識が低いのではないとも言える。今後は、専修言語と研究プログラムの一体性を高めていくように、研究プログラムの設計を再考する必要がある。

## II 教育課程について

### II 教育課程について

	①そう思う	②ある程度 そう思う	③あまり思 わ ない	④思わない	⑤わから ない	(無回答)	合計
1.自分の興味や関心に従って、授業科目を履修することができたと思いますか。	95	22	4	0	1	1	123
2 卒業するにあたって、この4年間で十分な語学学習ができ、語学力が身についたと思いますか。	58	53	8	2	1	1	123
3 社会で必要となる教養や専門知識など身に付けることができたと思いますか。	62	52	5	2	1	1	123
4.自らが学びたいという姿勢、主体的に学ぶ力は身についたと思いますか。また、卒業後も、自ら学ぶことのできる力が身についたと思いますか。	72	39	7	1	3	1	123
5「基礎演習Ⅰ」から「日本語表現法Ⅳ」までの日本語リテラシー科目は、様々な学修を行っていくうえで必要だと思いますか。	77	34	6	1	3	1	122

設問1では、「そう思う」「ある程度そう思う」と肯定的に回答した学生の割合は95.1%（昨年度は92%）で昨年度とほぼ同じである。教養科目や専門科目などを通して、学生たちが必要とする知識や教養を身につけることができたと評価していると考えられる。

設問2の語学力については、本学の語学教育課程において、「そう思う」「ある程度そう思う」とある程度以上の語学力を身につけることができたと肯定的に回答した学生の割合は90.2%にのぼり（昨年度は90%）、設問4と関連するものと考えられる。

設問3は、「あまり思わない」「思わない」の割合が昨年度（10→7）とよりもやや減少し、「思わない」とする回答は1名（昨年度1名）であった。一方、「そう思う」「ある程度そう思う」と回答した学生の割合は92.6%（昨年度87%）で昨年度よりやや増加した。上述の専修言語のアンケートにみられたように、専修言語と研究プログラムの主体的学修意識が醸成されており、学びたいことが学べたとする卒業生が多かったということであろう。

設問4は、大学教育の本質的役割の問いであるが、「そう思う」「ある程度そう思う」と肯定的回答した学生の割合は90.2%で昨年度よりやや増加した（昨年度は85%）。一方、「あまり思わない」「思わない」という学生も一定数はおり（6.5%）、主体的学びに関して若干の不安をかかえている学生がいるということだろうか。ただ、多くの学生たちは主体的な学修に取り組める自信を持って卒業してくれたと言えるだろう。

設問5の、初年次導入科目ならびに日本語リテラシー科目（1年次～3年次必修）の必要性については、「そう思う」「ある程度そう思う」と回答した学生の割合が90.9%あり（昨年度は92%、一昨年度は94%）、その必要性の認識は定着してきたと言えそうである。

教育課程の設問については、全体として「あまり思わない」、「思わない」との回答が昨年度までと同様に10%以下であり、概ね高く評価されていると受け止めて良いと考える。

### Ⅲ 大学生活について

	①そう思う	②ある程度 そう思う	③あまり思 わ ない	④思わない	⑤わからない	(無回答)	合計
1.学業にやりがいを持って取り組むことが できたと思いますか。	84	29	9	0	0	1	123
2.自分の学生生活(学業以外)は楽しかっ たと思いますか。	76	40	5	1	0	1	123
3.授業内外、課外活動などで教職員との 接点を持つ機会はあったと思いますか。	61	38	19	3	1	1	123
4.在学中の交流はできましたか。	81	32	7	1	1	1	123
5.全体的に大学側のサポートは適切でし たか。	61	48	8	2	3	1	123

設問1の学業面について、「やりがいを持って取り組めた」とほぼ肯定的な評価が寄せられて91.8%となっており、昨年度とほぼ同じである（昨年度は90%）。9割以上となるこの数字をみれば、全体として、充実した学業生活をおくることができたと受け止めている学生がほとんどだと考えて良いだろう。

設問2の学生生活全般についても、①と②を合わせ、「楽しく過ごせた」とほぼ肯定的な評価が寄せられており、94.3%となっている（昨年度は91%）。この数字をみれば、全体として、充実した学生生活（学業以外でも）をおくることができたと受け止めている学生がほとんどだと考えて良いだろう。

設問3は教職員との距離感をたずねているが、これは「そう思う」「ある程度そう思う」の割合は80.4%で昨年よりやや増えた（昨年度73%）ものの、一昨年（81%）とほぼ同程度であった。少人数、教員と学生との近さ、接点の多さをアピールしていることから、この評価を失うことのないようにすることが重要である。

設問4では、日本人学生・留学生を含め、学生間の交流についてたずねている。設問は「在学中の交流はできましたか」とやや抽象的な質問となっており、留学生との交流（日本人学生にとって）、日本人学生との交流（留学生にとって）、また留学生同士、日本人学生同士を分けずにたずねた。どのような交流を思い描いて回答したかは明確ではないが、少なくとも数字から見れば、「そう思う」「ある程度そう思う」の肯定的評価の割合は91.8%になっており（昨年度は84%）、学生同士の交流は積極的にはかられたようである。

設問5も曖昧なたずねかたであるが、「そう思う」「ある程度そう思う」の回答は88.6%で昨年度の84%より若干増えている。この回答の結果からみれば、4年間学んだ大学に対しておおむね肯定的な評価判断を下しているといえよう。

設問全体としてほぼ9割近くの肯定的な評価が見られたと受け取めて良いと思われる。

#### IV 自由回答について

自由記述ではほとんど否定的なコメントは見当たらず、大学への好意的なコメントが寄せられている。その中でもいくつか、参考になるコメントを抜粋しておきたい。

「先生によって熱心度が違うと思う。」

「長崎外国語大学での生活を通して、この大学に通わなければ出会えなかった海外の友人に出会うことができました、また、心から信頼し合える友人もでき、本当にこの大学に通えてよかったと思いました。」

「日本や留学先での文化の違いや問題が起きた場合の分析力がかなり身についた。」

「現在、コロナで留学など国際的な交流が難しいですが、外大生として英語、ドイツ語を十分に学ぶことができました。入学前よりも積極的な自分になったと思います。4年間と短い間でしたが、ありがとうございました。」

「アットホームな学校だと思った。高校みたいで人との親密度が高いように感じた。」

毎年のものであるが、これをもとに問題点や課題について点検し、これを修正・改善することによって、より良い教育環境及び学修生活環境を実現していくことが本来の目的であることを確認しておきたい。

2020年度 教育支援部長

小鳥居伸介

2021年5月10日